

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.364



2002 MARCH



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2003年H A J 登山隊隊員募集

八千メートル峰 シシャパンマに新ルートを探して

ヒマラヤの八千メートル峰に新ルートを開拓する余地はないか。このテーマ（夢）を追い求めて過去岳人達は様々な努力をしてきた。

1990年代に入り日本隊では、90年チョゴリ北西壁下部（横浜）、95年マカルー東稜下部（JAC）、97年K2西壁上部（JAC東海）など部分的な開拓が行われ、94年山野井泰史が単独でチョー・ユー南西壁に新ルートを開拓した。

現在シシャパンマ峰は、主峰の標高を8,027mとした場合、中央峰の標高が8,008mとなる。このため中国隊が初登頂した北面から中央峰北東稜を登りそのまま中央峰に登頂しているケースがほとんどとなっている。初登頂した中国隊は中央峰北東稜から大雪面をトラバースして主峰に登頂している。日本隊では81年女子隊、88年H A J隊、99年群馬隊は、この大トラバースを行い主峰に登頂した。他隊は何故トラバースして主峰に登頂し

ないのか。それは「雪崩」の危険を避けるためだろうと推測される。しかし、中央峰に登った岳人たちはそこが「8,000m」の標高を与えられているからなのだが、ヒマラヤの標高は不動ではない。今後中央峰の標高が8,000mを切ることも考えられる。

シシャパンマ主峰に新ルートは考えられないのか。常々疑問に思っていた。技術的に困難な南西壁では通常ルートにはなり得ない。可能ならば通常ルートとなり得るようなレベルの新ルートをトライしたいと考えている。意欲ある岳人の参加を期待する。

記

1. 時期 2003年9月10日～11月8日（60日間）
2. 募集人員 10名程度
3. 負担金 100万円
4. 申し込み、問い合わせ H A J事務局

表紙写真

2001年10月9日、ヤンラ・カンリ入山以来初めての快晴。8時の交信を終えてすぐにラマ氷河下流の河原に出てランプー・カンリに陽が射すのを待った。いつもは雲の中に在るネパールとの国境に聳える6,124m峰（地元民はカエコンバとかバイブーと呼ぶ）もこの日だけはすっきりと雄姿を現わした。

（写真と文：山森 欣一）

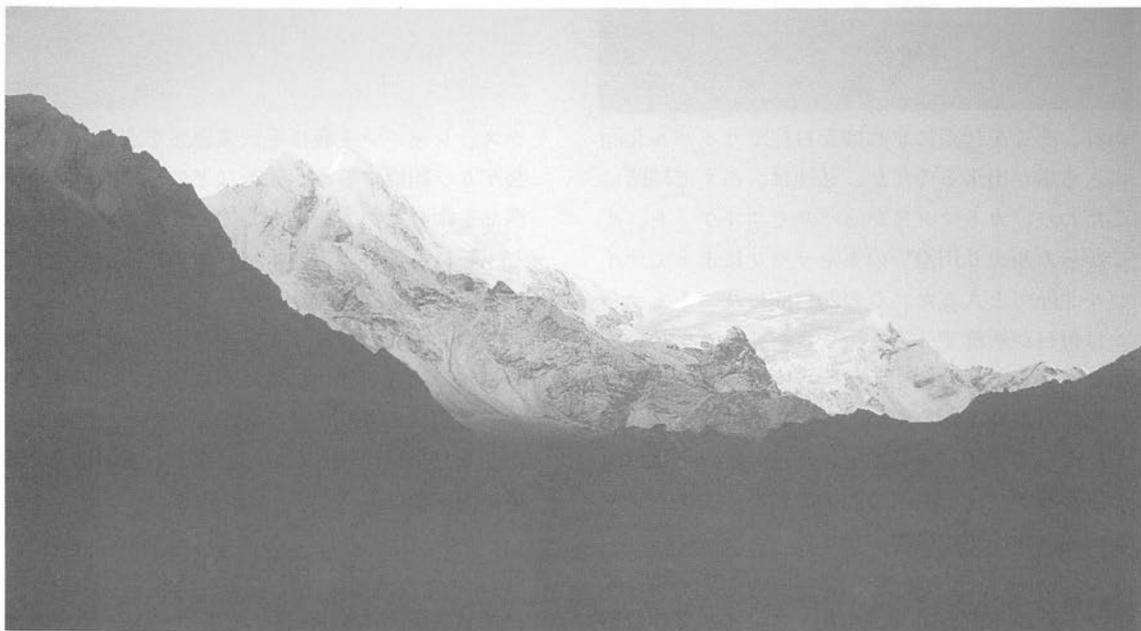
ヒマラヤ No.364

1. 祖母の乳房に抱かれて 野沢井 歩
16. ヒマラヤ・ニュース 〈地域ニュース・トピックス・Books・ヒマラヤから〉
19. ネパール観光省、高峰103座を解禁
24. 寸感・事務局日誌

祖母の乳房に抱かれて

— 聖なる西の地に聳える山「アピ」登山の記録 —

チーム・アピ・2001 野沢井 歩



▲アピ・コーラより見るアピ。左手が前衛峰、右手奥がアピ

「私達はインドと国境を分ける長いマハカリ川沿いのキャラバンを終えアピ・コーラへと入った。双耳峰のアピの山容は女性の乳房を想像させる。アピとは「祖母」の意味であるが、チベットとの交易者やカイラス巡礼者にとってこの乳房を仰ぎ遠い故郷の祖母を想ったのであろうか？」

はじめに「アピへ」

聖山カイラス（カン・リンポチェ）。西チベットに聳えるこの山は、ヒンドゥー教、チベット仏教、ボン教の信者にとって聖なる山として崇められている。又、カイラスの南にはインダス、サトレジ、ヤル・ツアンポ、カルナリといった4つの大河の源流（実際はその周辺）となるマナサロワール湖（マバム・ツォ）が聖なる湖としてあり、い

かにこの西の地が聖なる場所かという事が解る。このカイラスを中心とした一大聖地となるこの西のエリアにはナムナニ（7694m）、サイバル（7031m）、アピ（7132m）といった7000m峰が3座鎮座する。ちなみにナムナニは中国（チベット）領、サイバル、アピはネパール領となる。これらの山々は古くからカイラス巡礼者、チベット、プラン（タクラコット）とネパール、インドの交易者によって知られていた。

この西の地の登山を始めるきっかけとなったのは'98年のサイバル登山であった。私、岩崎、古谷の3名はネパールで他の登山隊が無く、長いキャラバンを楽しめる山という事で、サイバル北面での登山を行った（ヒマラヤ327号参照）。現在、サイバル北面フムラ地方のシミコットには空路が開

▼聖山カイラス



かれ、そこを起点にすれば5日程でサイバル北面に入る事が出来るのだが、私達は、あえて陸路にこだわり、カトマンズからバスでスルケット、そこからカルナリ川沿いのキャラバンによってサイバル北面へと入った。この20日間に及ぶキャラバンは毎日が新鮮で「古き良きネパール」を味わう事が出来た。むしろサイバル登山よりこのキャラバンの方が今だ印象深いものとして心に残っている。そしてサイバル登山中、ルート上からは荒涼と広がるチベット高原に翌年の目標の山ナムナニが一際大きく望む事が出来た。

'99年ナムナニは日本ヒマラヤ協会の仲間と北面から新ルート、アルパイン・スタイルでの登頂を果たし、そしてかねてからの念願であったカイラスをコルラする事が出来た。(ヒマラヤ339号～340号参照) こうしてサイバル、ナムナニと登山を終えた私達3名にとって残された西のもう一つの7000m峰、「アピ」への想いが更に大きく膨らんでいったのだった。

マオイストの勢力拡大と王室乱射事件

こうしてアピの計画は始まった。サイバル、ナムナニと共にした野沢井、岩崎、古谷の3名の他に今村、荻原。BCまでの支援隊員として松館、今村夫人が参加。合計7名の仲間が構成された。皆、西ネパールで「古き良きネパール」を味わいたいというのが大きな目的だ。

'00年、チベット、クーラ・カンリの登山を終えカトマンズへ立ち寄ると、お世話になっているコスモトレックの大津さんよりマオイスト(マル

▼ナムナニより望むマナサロワール湖



クス、レーニン主義に毛沢東思想を取り入れた武装ゲリラ組織で警察、銀行などの襲撃を行ない中西部を中心に勢力を拡大している)の勢力が拡大し、特に私達の入る西ネパールの危険が増大しているという情報を得た。そして'01年6月、ニュースで報じられたショッキングな王室乱射事件。ネパールの治安の悪化は最高潮に達し、このままアピの登山はあきらめざるおえないかと心配されたが、9月には治安もだいぶ回復し、無事出発する事が出来た。

アピという山

アピは東西に800km連なるネパール・ヒマラヤの最西端に位置するアピ、ナンパ山塊の主峰である。カイラスへの巡礼路の一つティンカール・パスからもよく望む事が出来、古くから知られていた山である。山名のアピは「祖母」を意味する。'54年春、アピへ最初に挑んだのはイタリア隊で南壁をあきらめ北面ルートに入ったが4名中3名が犠牲となる悲劇となった。初登頂は'60年春、同志社大学隊によって同じ北面ルートから成された。'71年松本登高会、'73年中央大学と南壁～西稜ルートから挑戦されたが失敗に終わっている。'78年イタリア隊が南面～東稜ルートによって第二登を果たした。その後、圧倒的な南壁は'96年スロベニア隊によって成功された。北面は同志社大学以降、'83年冬ポーランド隊、'91年春に韓国隊が入山している。

アピBCへ

9月2日～6日 カトマンズ準備

カトマンズにそれぞれバラバラに集合。出発直前に支援隊員として参加予定の松舘氏が足を痛め急遽キャンセルとなってしまう残念であった。

9月7日 カトマンズ～ネパールガンジ

カトマンズでの準備も整い、チャーターしたバスに、隊員6名、スタッフ4名、連絡官、そしてポーター28名を乗せカトマンズを出発した。上手いダルバートが食べられるムグリンで昼食。ここからポカラへの道と別れトリスリ川沿いを南下する。ナラヤンガートからはタライ平原を西へひたすら走る。プトワルを過ぎるとどっぷりと陽が落ちた。タライ平原の夜は空に満点の星、そして木に群がるホタルの光でさながらイルミネーションの様だ。今回、マオイストの襲撃が恐い為、夜間の走行は控える予定だったが、結局ネパールガンジへ到着したのは夜の11時を回ってしまった。

9月8日 ネパールガンジ～ダンデルドーラ

ここネパールガンジには連絡官の職場があり、彼の残った仕事の処理の為に随分遅い出発となってしまった。道路は途中バルディア動物保護区を突っ切る。連絡官曰く、ここはチトワンより多くの野性動物を見る事が出来るらしいが何も出てこなかった。

▼タライ平原を西へ



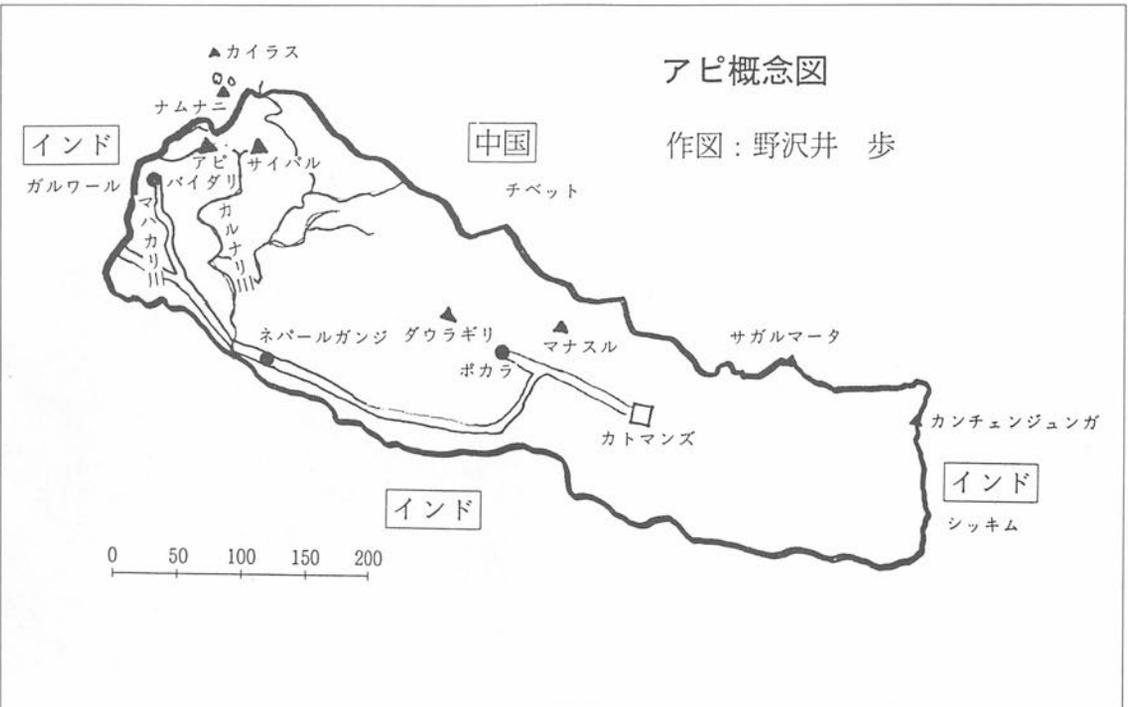
大きな川を渡る。カルナリ川だ！'98年サイバルはこの川沿いを延々とキャラバンしたのだ。ここに掛けられた立派な橋は日本の援助で作られたらしい。橋のたもとの村チサパニで昼食。この食堂ではカルナリ川で採れたアサラ、サハラといった魚を食べさせてくれる。

更に西へ！アッタリアで幹線道と別れ、バスは山腹を縫うように山道を登り始める。途中パンクで時間をロスしたが、21時にダンデルドーラへ到着。ここはサイバルの南面に至るキャラバンの起点となる街でもある。

9月9日 ダンデルドーラ～バス終点地

アピ概念図

作図：野沢井 歩



▼カルナリ川を渡る



ダンデルドーラからの山道はしばらくすると舗装道路から砂利道へと変わり、道路の巾もだいぶ狭くなってきた。1時間程でこのバスでは通行不可能という事になり、このバスを捨て、別の小型バスへと乗り換える事になった。このハプニングで大幅に時間をロスしてしまった。道は更に細く険しい山道を進む。峠を越え飛行場もあるパタンの街へ。ここから更に険しい山道を登る。定期バスの終点地スリコットから更に林道を30km程進んだ辺りでバスを降りる。すっかり陽も落ち、飯を喰うバッテリーも閉まってしまった。林道から谷を挟んだ対岸にはバイダディの街の明かりが見える。

9月10日 バス終点地～グクレス

この林道は更に先まで伸びており昨日バスを途中で返してしまった事を後悔する。ルートは林道を離れチャムリア川までかなり下る事になる。標高は600m程度なので、非常に暑い。更にポーターは昨日、バッテリーが閉まっていた為ろくに食事も採っていないのだ。その為ポーターのスピードは遅く、最後のポーターが私達の待つ昼食場所に着いたのは夕方4時を回っていた。この先このペースだと先が思いやられるが、初日という事もありチャムリア川沿いの村グクレスに宿泊。ここではチャムリア川に大きな橋を建設中で近い将来ダルチュラまで車道が伸びる事であろう。夕方激しい豪雨。ポーターもずぶ濡れで到着。

9月11日 クグレス～バルムレ

ダルチュラへの林道をショートカットする形に登山道は伸びる。蒸し風呂の様な暑さのキャラバン。水場や沢を見つけては水浴びとなる。道が沢

▼チャムリア川



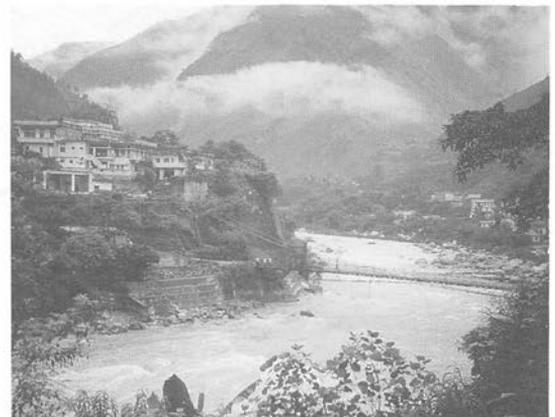
筋となると、多くのジュガ（山蛭）も出現する。バルムレ村の学校の校庭にキャンプ。夜中に又、激しい雷雨。テント内も水浸し。

9月12日 バルムレ～ダルチュラ

この日もジュガの多い沢筋を詰める。このルート、陽も当たらず涼しいのでポーターのスピードも上がってきた。ピナエクコカンという峠に到着。峠の向こう側の山並みはインドだ。

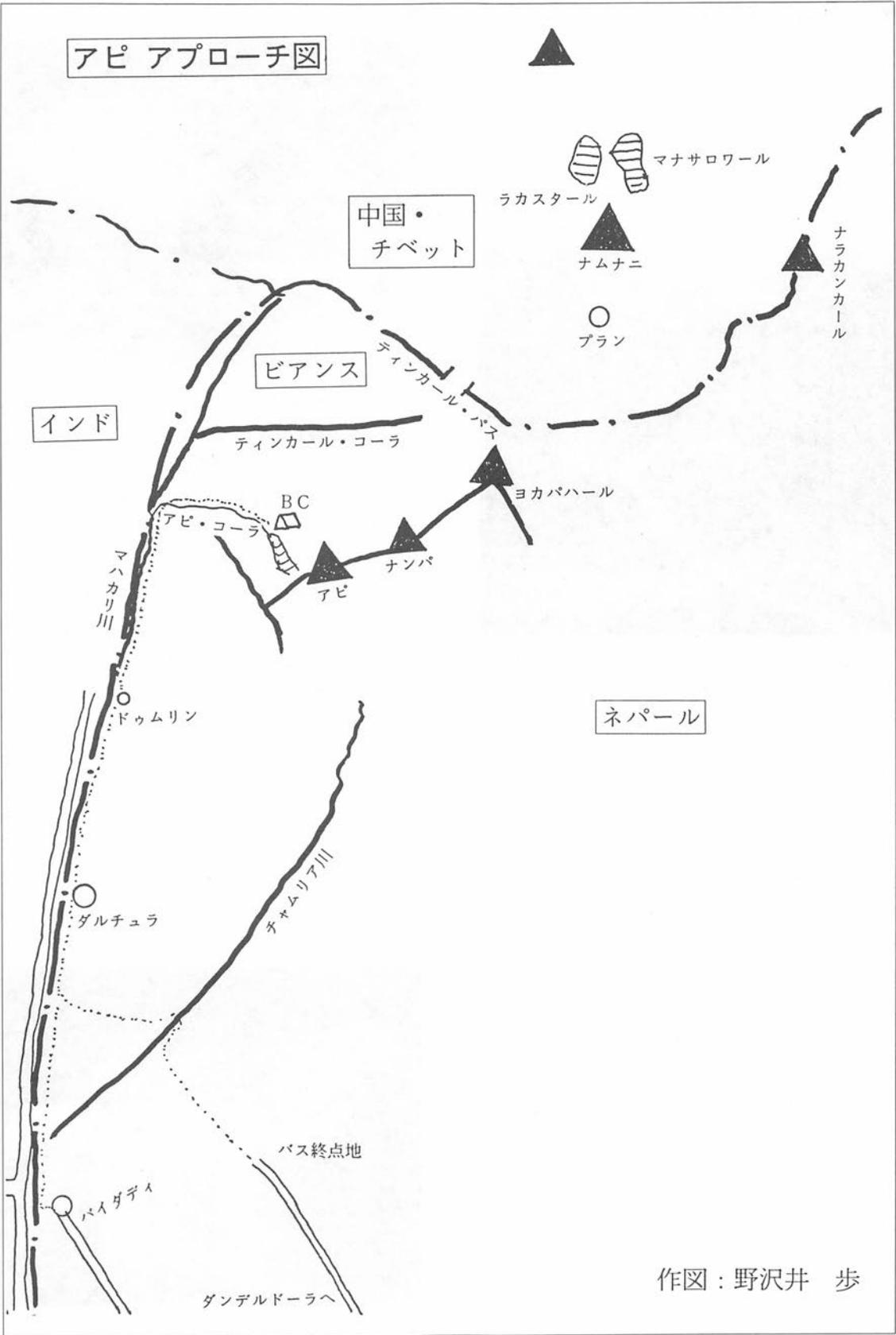
峠を下るとマハカリ川沿いの道へ出る。このマハカリ川がネパールとインドの国境となるのだ。対岸のインド側には立派な車道が伸び、トラック、バスが通行している。私達のたどるネパール側の道は相変わらずの山道だが…。

マハカリ川沿いを2時間程歩くとこのエリア最大の街ダルチュラに到着。ここはダルチュラ郡の郡都で銀行、電話局、バザール、などもありかなり大きな街だ。対岸のインドとは吊り橋で結ばれ、交易も盛んである。早速コックがニワトリを仕入



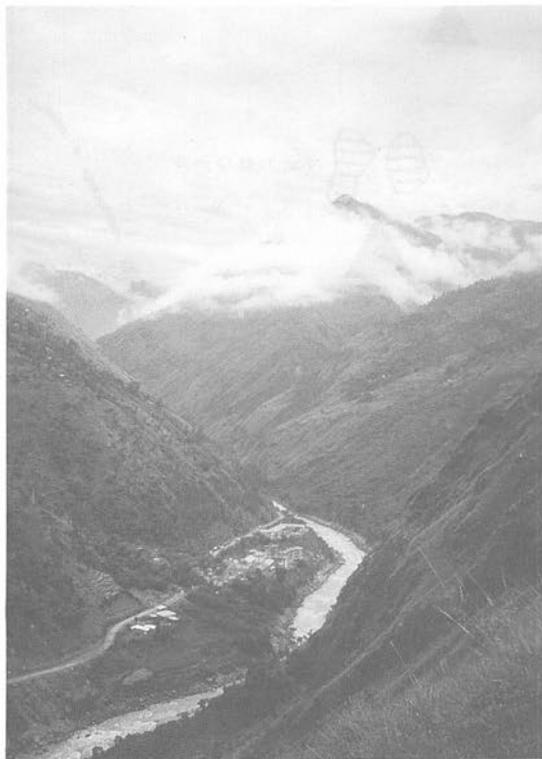
▲ダルチュラ。対岸はインド

アピ アプローチ図



作図：野沢井 歩

▼マハカリ川、インド側には車道が伸びる



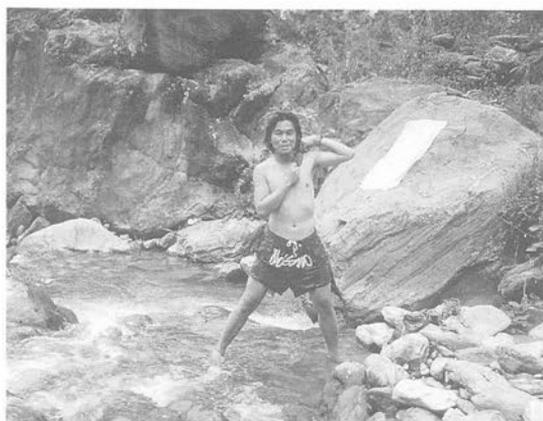
れにインド側へと出掛けて行った。ここではゲストハウスに宿泊予定だったがどこも満室で、結局サッカー場にテントを張る事になった。いつものように大勢の人々がこの珍客を見学に訪れて来る。久しぶりのビールを飲み、すっかりご機嫌な所へ連絡官による体の不調の訴え！。結局しばらくここに残り調子が戻った後、インド経由でBC入りする事になる。ネパール人はインドの出入りが自由なので、ここダルチュラからインド側に渡り車を使った方が楽にBCまで到達出来るのである。いつもながらお荷物の連絡官！。

9月13日 ダルチュラ～ヒュッティー

連絡官を残し出発。ダルチュラを過ぎると、私達ネパール側の川沿いに付けられた道は途中から大高巻きを強いられる。それに比べ対岸のインド側には大きなビルが立ち並ぶ。これはこの辺りに多く建設中の水力発電所作業者の宿舎だそうだ。時折ハッパの振動がネパール側を大きく揺らす。それにしてもマオイスト警戒中のライフルを持つ警察隊が随分多いのが気に掛かる。ヒュッティーでテント泊。

9月14日 ヒュッティー～スンシエラ

▼連日の猛暑の中、恒例の水浴び



昨日の警察隊は皆途中でダルチュラに引き返していった。替わって、ライフルを持った民間人が多い。途中のバッチィ（茶店）で茶を飲んでいると、彼等は店中の搜索を始めた。なんでも彼等は武装したマオイストで、禁止している「酒」を隠し持っていないかの捜査らしい。一番恐れていた事態だ！あまり関わりたくないのを先を急ぐ。しかし、朝から発熱で調子を崩していた古谷の症状は悪化し、40度近い熱。動かすのは危険な為、行動を早めに切り上げすぐ近くのスンシエラという村の校庭にテントを張る事にする。しかし、悪い事は重なるものでその校庭では先程のマオイストが演説を行っていた。本来、早くこの村から逃げ出したいのだが…。この日は私達もさすがに毎夜行っていた宴会を控え早目に就寝。

9月15日 スンシエラ～フェルチューム

古谷の熱もだいぶ下がった。特にマオイストとの間にトラブルは無く出発。段々畑が広がり、そ



▲チエットリー族の村人と

▼夜のオカズとなるワラビを採取するコック



ここで生活する人々の家が点在するのどかな農村風景が展開する。途中の大きな支沢を渡る所では、一本の丸太が掛けられているだけで、落ちれば激しい流れの中命はないだろう。私達にも恐ろしいが30kgの大荷物を担いでのポーターには不可能に近い。そこで沢の上流へ移動し、膝程度の渡渉で済む場所にロープを張りポーターを渡す。この作業でだいぶ時間をロスしてしまった為、渡った河原で食事にする。タルカリ（野菜）は今まで随分と痛めつけられたイラクサである。ポーター達も水浴びをしたり実に楽しそうだ。この長いキャラバンを通して次第にポーター達とも連帯感が生まれてきたのを感じる。適当なキャンプサイトが無くフェルチュームの民家に泊めてもらう。ここではロキシーを置いていた。

9月16日 フェルチューム～ドバケ

フェルチュームより1時間程でドゥムリン。ここはインド側とは吊橋で結ばれ、電話もある結構



▲ロープを張って沢を渡渉する

▼インドからのプレゼントされた山羊



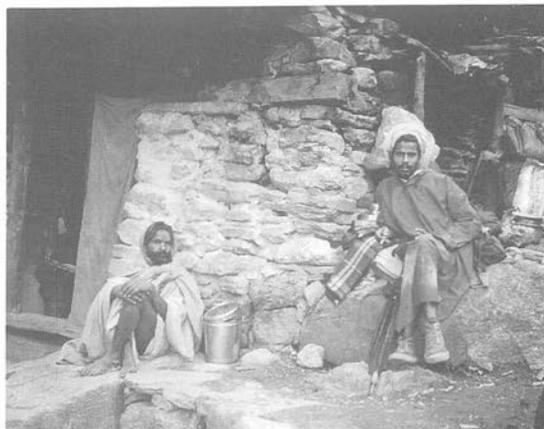
大きな村である。ここからは今までの農村風景が一変しマハカリ川はゴルジュの溪相となり、その断崖絶壁を削り取った険しい道となる。インド側の車道もここまでで、ネパール側同様の山道と変わる。民家も無くなり昼食も河原で自炊。しかし、道端では沢山のワラビを採取出来、美味しいタルカリにありつけた。

アピ・コーラ手前最後の村、ドバケ、ここではカイラス巡礼を終えた多くのサドゥー（行者）が休憩している。多くの山羊、中国製品を山積みにした馬の隊商（キャラバン）の往来が激しく次第にチベットが近づいてきたのを感じる。

この日更に珍しい贈り物を頂いた。対岸（インド）を歩く山羊の群れの一匹がマハカリ川に転落。それを私達のポーターがネパール側でゲット！思わぬインドからのご馳走に皆大喜び！

9月17日 ドバケ～アピ・コーラ

いよいよアピ・コーラに入る。しかし、私達の

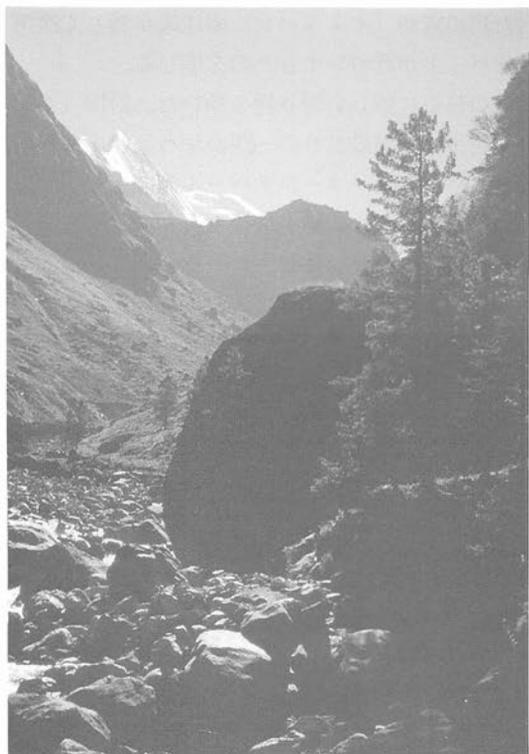


▲カイラス巡礼を終えたサドゥー（行者）

▼ガンジャを作るサドゥー



持ってきた地図は概念図みたいな地図の為アピ・コーラの出会いが解りづらい。アピ・コーラの出会いは意外にも、細く急な滝となってマハカリ川に落ち込んでいた。街道を外れ小さな橋の掛けられたアピ・コーラへ入ると谷は開け、雪を被ったアピの山腹を望む事が出来る。一際立派な尖ったピークは前衛鋒で更にその奥、顕著な双耳峰を持つアピがどっしりと構えている。アピ・コーラは大きく3段に分れており、各段とも広い谷となっており過去の氷河後退の様子が伺える。



▲アピ・コーラ出会い

▼BCに到着！カトマンズ全ポーターと



途中大高巻きを強いられたりして2段目の谷まで上がるには時間的にも標高的にも激しい為3600m付近で泊まる。

9月18日 アピ・コーラ～BC (4000m)

早朝に出発。2段目の谷へ急なガレ場を登る。放牧の為かトレースはしっかり付けられている。2段目の谷も大きく開け、兩岸のサイドモレーンは既に草木に覆われ放牧地とされている。この広い2段目の谷を抜け、急な草付きを登り3段目の谷に入った辺り4000m付近をBCとする。

ポーターに給料を支払い、一人一人と握手で別れる。ポーターが帰ると私達だけの世界となった。テント、キッチン、タルチョーを建て、沢に水洗トイレを作りささやかな私達の村が出来上がった。

9月19日 BC開き、プジャ (安全祈願)

荷物整理後、BC開き、プジャを行なう。いよいよ登山開始だ。



▲BCでの隊員とスタッフ

▼BC全景



登山活動

C 1 建設

9月20日、BC～RC（リレーキャンプ）

BC周辺はボルダーにいい巨岩がゴロゴロし、深い草原に覆われている。この草がくせもので朝早いとその露払いの為、靴はビショビショになってしまう。この草木に覆われた巨岩帯を抜けると広大なアブレーション・バレーが広がっている。絶好のBC適地だが水が10月に入ると涸れてしまう。アピ・コーラを挟み対岸に聳える6500m級の無名峰も立派だ。この気分の良いアブレーション・バレーを辿ると、4200m地点に氷河湖が現れる。ここは同志社大学隊がC 1とした場所である。私達のBCから1時間弱という距離である。同志社隊のBCの標高と私達のBCは同じ4000m地点なのだが、どうも標高がおかしい、同志社大学隊のBCは私達のBCよりかなり下に作られたと思われる。この氷河湖をC 1にするには余りにも近すぎるのでしばらくデポキャンプとして更に上部にC 1を作ることにする。

9月21日 C 1 建設

全員でC 1に向けて出発。発熱から依前体調を崩している古谷が視覚障害を訴える為BCに下山。残る4名で湖から左手の顕著なルンゼに入り、上部の尾根に出るルートを採用。ルンゼは急な草付きで谷川岳の国境稜線といった感じである。不安定な岩場を抜け、モレーンカバーされた緩やかな尾根をたどるとアピから前衛峰に続く稜線からの氷河に覆われた側壁に吸い込まれる。その尾根の

▼C 2 から見るアピ



末端はキャンプサイトにぴったりの台地がありそこをC 1とした（4950m）。過去の登山隊もここをキャンプ地としたらしく、古いゴミが所々に散乱している。

9月23日 C 1 荷揚げ

古谷は体調がすぐれず、アピ・コーラ出合いまで下降する事にする。結局更に下の村ドバケまで下る事になった。しかし、早い内の下山が効を成したのか数日後には登山に復帰する事が出来た。

ルート変更、C 2 建設

25日～29日 C 2 建設

C 1よりC 2へのルート工作に入る。C 1から前衛峰と稜線のコルを目指すルートを採用。C 1真上のセラックがぶら下がった急な氷河に入る。このセラックは絶えず崩壊しており、危険な状態だった。実際ルート工作を終え下降中にセラックの崩壊に逢う危うい場面もあった。このルートは



▲前衛峰からの主稜線から見るアピ

▼上部ルートから俯瞰する。岩峰は前衛峰



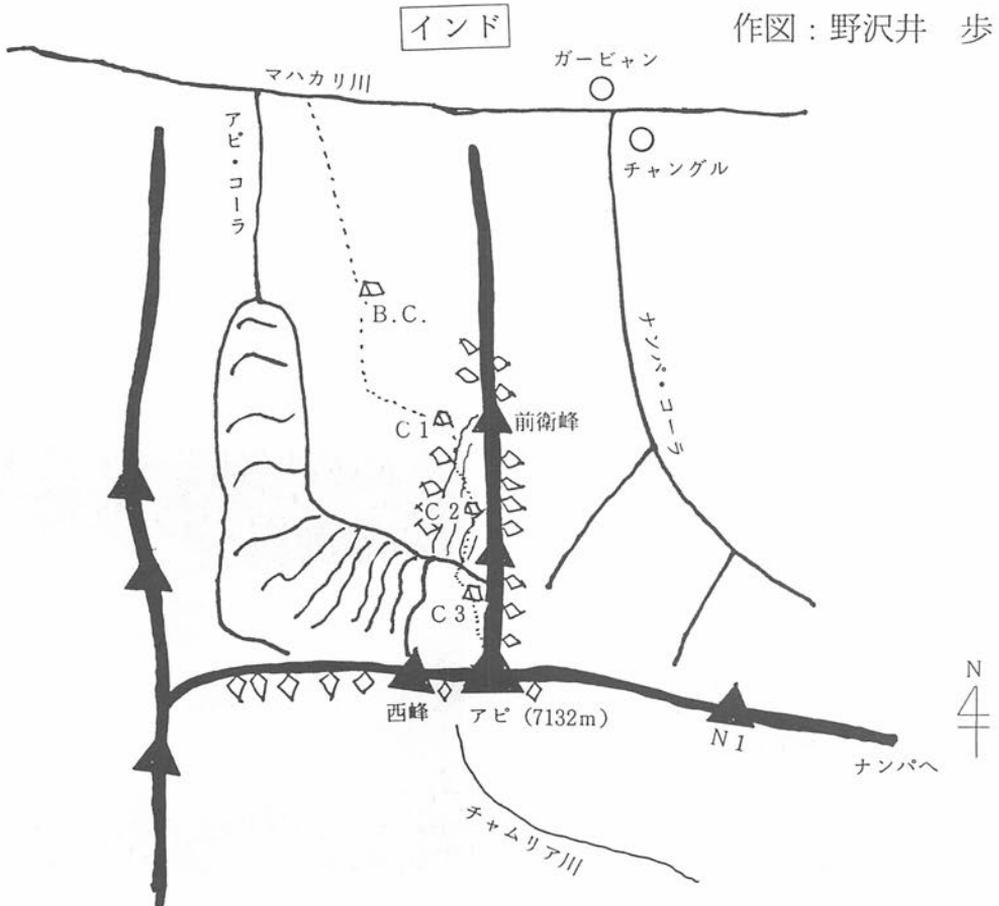
氷が露出している為、途中からロープを固定する。中程の小プラトーを抜け、冰雪壁となったルンゼを登り前衛峰と主稜線のコルを目指す。ルンゼ内に入ると前衛峰からの落石が絶えず私達を襲い気が抜けない。2日間かけそのルンゼを抜け、アピ

▼C 1上のクレバス帯



へ続く主稜線を覗くと稜の反対側、ナンパ・コーラ側は切れ落ちた岩壁で、アピ・コーラ側は急な冰雪壁となった険しいナイフリッジとなっていた。とてもこの長く厳しい稜はルートに出来ず。残念ながら固定したロープを回収しながらC 1へと撤

アピ ルート図



▼インド、パンチ・チュリ (6904m)



退した。

9月28日 ルート変更

同志社大学隊のルートへ変更する。アピからの主稜線からは急雪壁、そして岩壁となってアピ・コーラへ落ち込んでいるが上部中盤に続く氷河を辿ればアピ山頂からの上部プラトーに出られる様である。C1より岩場のバンドをトラバースし三角雪田に入る。ここを登りセラック帯をトラバースすると大きな氷河に入る事が出来た。この氷河は、傾斜は緩いがいくつもの大きなクレバスが口を開けている。そのクレバスを避けながらジクザクと上部へと抜ける。途中の崩れそうな大きなスノーブリッジには固定ロープを設置した。上部に抜けるとアピの全容が望めるが、午後になると必ずガスが覆いルートの確定が出来ない。5600m付近をC2としC1へ戻る。この日、夕方から珍しく風雪となる。

9月29日～10月1日 C2 荷揚げ



▲C3、後方にナムナニ、カイラス

▼アピ西峰



古谷、荻原によってC2への荷揚げ、そして上部のルートが確認され、いよいよ頂上に向けアタック体制が整った。

アタック

10月3日より一次アタックとして野沢井、今村、5日より二次アタックとして岩崎、古谷、荻原のオーダーで頂上を目指した。

10月3日、C1へ移動。4日、C2移動。上部のルートを偵察。5日、先日の偵察したルートを辿る。アピの上部プラトーに出るには尾根筋に行かず、大きなクレバスを避ける為にアピ氷河側へ一日下降し登り返す。上部プラトーへはそのまま広い斜面を登って出られそうである。傾斜の落ちた6200m付近にC3（アタックキャンプ）とし整地するが下は氷でアックスを振って何とかテント一張り分の整地をする。しかしこの日は風が強くてともテントを張れるような状態では無い。仕方なく200m程下降し、風が少し弱まった場所にテントを張る。しかし、風は吹き続きまんじりとし無い夜を送る。

10月6日、予定の時間を大幅に送れて5時20分にC3を出発。相変わらず風は強く、指先がジンジンしてくる。チベットの山々、カイラス、ナムナニが赤く輝き始める。その山々の間にはチベットの赤茶けた大地の中、青いラカス・タル、マナサロワールの2つの湖も見える。西にはパンチ・チュリ、ナンダ・デヴィといったインド、ガルワールの山々と最高の景色が展開する。急な氷雪壁からセラック帯を抜けると、待望の上部プラトーに

▼カイラス



出た。

プラトーの奥には、二つの乳房の様なアピの双耳峰が鎮座している。ただ黙々と強風の中この広大なプラトーを登る。そしてやっとこのうんざりする様なプラトーの登りを終え、ドーム状の乳房が目前となった。2つの乳房はここ東側7132mのピークが主峰となる。そしてこの乳房への最後の登りに取り掛かる。北西側は雪庇が張り出しているので急な雪壁を登り右手から越える。雪庇の先は壮絶な南壁でチャムリア川まで3000m一挙に切れ落ちている。雪庇を乗り越し南壁沿いの雪面に出て12時過ぎに頂上に達した。西側には今だ未踏のもう一つの乳房(7100mか)が聳えている。

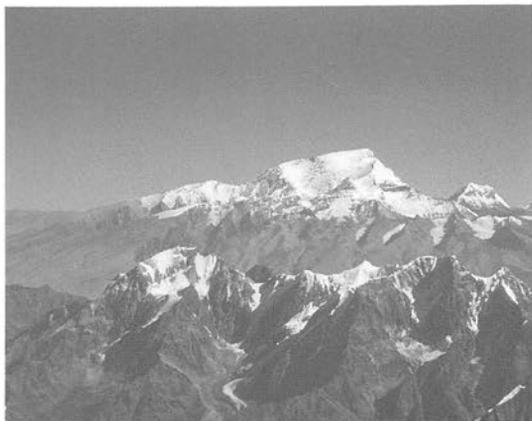
15時前、C3に戻ると今朝までの強風がウソの様に穏やかな天候となった。カイラス、ナムナニといった贅沢なチベットの山々の風景もやっとのんびりと眺められた。

10月8日、西から結構な雲が山頂へと押し寄せて



▲アピ・コーラ対岸の無名峰

▼ナムナニ



いた中、二次隊の3名も無事登頂を果たした。岩崎氏は7~8000m峰14座目の快挙。出だし体調を大きく崩した古谷も登頂出来、そして何よりも荻原が初めてヒマラヤの頂上に立つ事が出来たのがうれしい。

10月19日、こうして全員無事BCに下山し遅くまで宴会は続いた。

帰路ポーターがBC到着までの間を利用してティンカーン・パスへのトレッキングを行なった。

(詳細は次号掲載)

第二次登頂！(記：荻原 文彦)

10月15日、登山期間に入って16日目。その間、一度熱を出し、毎日下痢に悩まされてはいたが、遂にC1移動の時が来た。

既に3往復しているC1への道を、岩崎さん、古谷さんと共にゆっくりと歩き始めた。途中まで、文子さんとスタッフが送ってくれた。昼にはC1に到着し、ジフーズ、スープ類などを沢山食べた。ここC1は4~5人用テントなので、快適に眠る事が出来た。

10月16日、本日、野沢井隊長、今村さんの一次隊のアタック日である。我々は7時に古谷さん、私、岩崎さんの順にロープを結んだ。

クレバスを避けながら、700mを登高する。C2へのトレース。高度順化と荷揚げの為、既に2往復しているが、相変わらず心泊数は高く、足は重い。「この先、大丈夫だろうか？」

C2手前の急登を終えた所で、一次隊が登頂間近となり大休止。眼下4200m地点にある氷河湖に

いる文子さんとスタッフ達と共に一次隊の登頂の瞬間を待つ。直前の交信では雪庇が張り出している為、直上せず稜線上から登るとの事。結局、頂上で無線を開く事が出来なかった様だが、無事登頂の一報が入った。「おめでとうございます。お疲れ様でした。」

米粒大の野沢井さんと今村さんが超スピードで下降するのを見ながら、私達も再び登り始めた。一次隊の登頂で私達も気合が入った。

C2の狭いテント内は、容赦無い日射しとガストーブの熱で非常に暑かった。十分に水分を採り就寝。この高度での宿泊は初めての体験であったが、頭痛もそれ程でなく良く眠る事が出来た。

10月7日、今日からは、一步一步が未体験ゾーンである。C3へはそれ程標高差も距離も無いが、クレバスを避ける為に一旦下らなければならない。「とにかくゆっくり、ビスターリ。」と自分に言い聞かせて、重たい体を動かした。(無論ゆっくりしか歩けないのだが…)

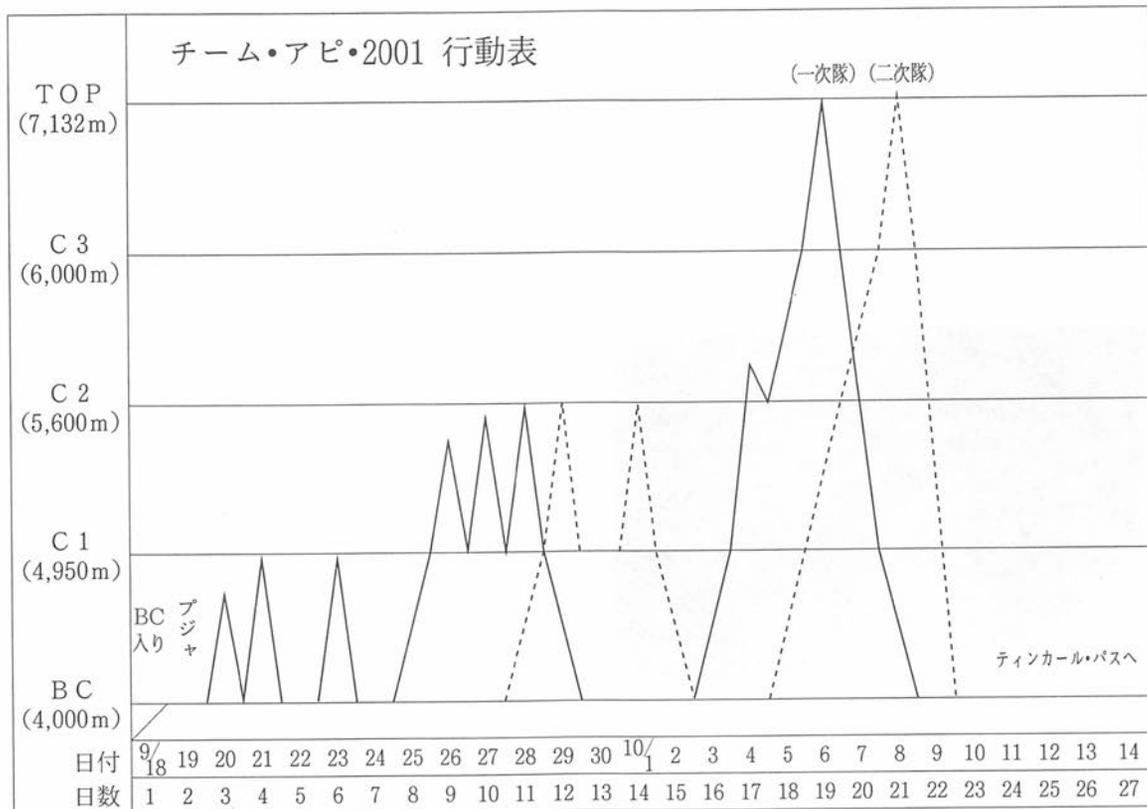
一時間半程歩いた緩斜面で一次隊と合流。上部ルート状況や談笑をして大休止。とにかく休憩がなにより嬉しい。「調子はどうや。頑張れよ」

▼一次隊とすれ違う二次隊



と今村さん。「寒みーぞー、長いぞー、ガンバレよ」とやけに嬉しそうな野沢井さん。二人に元気をもらい再び登高を開始。

C3手前の急斜面をへろへろになりながら、やっとの事で登り終えると、新しい展望が開けた。目の前にC3、そしてナムナニ、更に後方にカイルス。「よしやったぞ！取りあえずファイナル・キャンプまで来た。」贅沢なロケーションの中でお茶を飲み、一次隊の残した予備食でランチタイム。腹一杯食べたのがいけなかった。急に胃がムカム



▼ナラカンカール山群



かし、それに乗じて頭痛も増してきた。それもそのはず、初めての6000m。手も顔もかなり浮腫んでいる。

岩崎さん、古谷さんはナムナニ、グナ・ラ、カイラスの話題で盛り上がっている。日本国内ならまだしも、ヒマラヤのキャンプサイトで、自分達の登った山や行った場所を眺められるなんて、なんとステキな事だろう。

私は気分が悪く、夕食ではスープしか採れなかった。

陽が傾き、辺りが黄色、橙、そして赤く染まり始めたのでカメラを持って外へ出た。「なんと美しいのだろうか」刻々と変化する色の世界で、私は寒さも忘れ一時間も立ち尽くした。

※

BCレストの日の事である。日向ぼっこをしながら考えていた。「自分の登頂に誰が期待をしているのだろうか？」そして、誰も期待はしていな



▲壮絶なアピ南壁からチャムリア川を見る

いと感じ、突然孤独に襲われた。しかし、ハッと「自分が自分を期待しないで、自分を大きくする事は出来ないし、他人に期待される事も無いだろう。」とそんな当たり前の事に気付く事が出来た。結果よりもっと大事なものがそこにあると…。

※

暗くなってきたので、寝る準備に入る。「明日は一時起床、三時出発」と岩崎さん。「いよいよですね」「そうぜよ、泣いても笑ってもこれで…」と古谷さん。不安と期待、頭痛の中で眠りに就いた。この晩は風がととても強かった。

10月8日、二次隊頂上アタック。一時起床。お茶をのみ、ビスケットをかじりながら、ゆっくり体を暖めた。「調子はどうかね？」と聞く岩崎さんに流石に絶好調な事を言えるはずも無く。「何とか大丈夫です。」と答えるのが精一杯だった。自分の精で二人に迷惑を掛けるのではと、すごい不安とプレッシャーを感じたが、自分自身に期待する力の方が強く、アタックを静かに決意した。

2時40分、準備に掛かる。外は風が強く、ガスで星も見えなかった。古谷さん、私、岩崎さんの順でロープを結び3時出発。

ゆっくり歩き始め、4時半頃核心部の雪壁にさしかかる。足と手の指先、そして鼻先が寒さでジンジンと痛む。雪壁を抜ける3Pはスタカットで慎重に越えた。4～500m下にはクレバスが大きな口を開けている。途中、一次隊の固定したロープを気付かずに通過してしまった。雪壁を抜けると陽が指し始め。雲が多かったが「お日様、お日様。」とおおはしゃぎ。

雪原で小休止。しばらく雪原が続き、その後は30～40度弱の斜面が長くあり、頂上は見えない。とにかくここからはひたすらにガラガラ登っていく事になる。

再び歩き始めたが、少し緊張感が取れた事もあり、急に体が重くなってしまった。何度なく立ち止まり、その度二人に迷惑を掛けてしまった。やがて緩斜面の先にピークらしきものが見えてきた。10時の交信でそれが頂上である事を確認する。岩崎さんが「おーい、荻原もう少しだぞ。」と励ましてくれた。私は正直ここまで来れるとは思っていなかったで涙ぐんでしまった。そこから頂上

▼山頂に立つ二次隊



に続く稜線へ右上し、そこでガスが取れるのを待つ。稜線上には古谷さんが待っている。そこへ行けば頂上は目前である。やはり途中足が止まったりしたが、胸は高鳴り、様々な事を想う内に稜線に出た。登頂前だが、たまたま古谷さんと抱き合い泣いてしまった。古谷さんとは7ヶ月前のピサン・ピーク、頂上手前400mで敗退し、辛い思いをしていた。だから一緒に頂上に立てる事が本当に嬉しかったのだ。

岩崎さんも間もなく来て、無線でこれから登頂する事を伝えた。中々ガスは完全に消えない。野沢井さんが3度確信に満ちた顔で「オープン、ザ、モンsoon!」を宣言していたハズなのに…。

結局、今一つの空の下、一人ずつ確保しながら頂上に向かい、11時に3人全員が山頂に立った。

皆と交信し、文子さんやスタッフは氷河湖で見守ってくれていた。「おかげ様で登頂出来ました。有り難うございました。」興奮状態で、詳しい事



▲登頂後抱き合う古谷、荻原

はもう忘れてしまっている。

11時半頃、下降開始。雪原までは一気に下り、大休止。テルモスのホット・アクエリアスを飲み、ビスケットをちょっとかじったら、もう眠ってしまいたい程に疲れを感じた。しかし、そんな訳も行かず下降。固定ロープを回収し、慎重に下る。危険地帯を過ぎた場所で、その旨を隊長に無線で伝えた。

C3はもうすぐ下に見えている。「今日のお茶は、又、格別だろうな。」

10月9日、6時起床。顔がパンパンだ。7時過ぎ、陽が差し暖かくなってきてから撤収。C2跡まで下りやっと無線が通じた。昨日、途中から無線が通じず、隊長には大変心配を掛けてしまった。今日中にBCまで降りる事を告げる。ここからは先頭を歩かせてもらいC1まで下降。

C1を撤収すると3人のザックは限界まで膨れあがり、更に靴やゴミなどがくくり付けられ大変な騒ぎだった。12時半頃、ヨロヨロとそれでも気持的には胸を張って、下降した。

氷河湖ではみんなが待っている。

帰路キャラバン

10月15日 BC～ドバケ

サーダーのディビが集めてきたドムリンのポーター12名が前日BCへ集結した。中国ブランディーで遅くまで盛り上がっていた。

私達もテントの撤収、梱包、最後のゴミ燃やし等慌しい朝を迎えた。

荷物の梱包が済み帰路キャラバンを開始。25kgの荷物で350RS。これはネパールの相場からするとかなり割高となるが仕方ない。今ポーター一見強そうに見えたが、あまり担ぎ慣れていないとみてスピードも上がらず、ほとんど往路と変わらない日程でマハカリ川沿いの道を下る事となってしまった。

チャングル付近で放牧されていた山羊もドバケ近くまで降りてきている。

ドバケの岩場でボルダーを楽しんだ。

10月16日 ドバケ～フェルチューム

途中のインド側のマルファは3年前岩が崩れこの村を飲み込み500人ものが亡くなったそうだ。

ナイケの娘も被害者の一人だ。

ポーターの住む村、ドゥムリンへ到着するとポーター5名が嫌になったのかここでやめてしまった。フェルチュームの民家に再び泊めてもらう。

10月17日 フェルチューム～ヒュティ

マオイストと遭遇した村スンセラを足早に通過する。ダサインの祭りの為かこの村でも昼間から宴会が行われている。日本の正月と同じである。

往路での大変だった渡渉地点には橋が架けられていた。

10月18日 ヒュティ～ダルチュラ

緩く山腹を巻く様に下る。マハカリ川の大高巻きの道もトラバースする道が修復されていた。

道行く人々がどこで聞きつけたのだろうか我々のアピ登頂を祝福してくれる。

タトパニ（温泉）を過ぎるとダルチュラだ。ダサインの為近くの村人も着飾ってバザールへ買い物らしい。ダルチュラに正午到着。時間は早いが久しぶりのビールを飲む為早めに行動を打ち切る。ゲストハウスに泊りビールを堪能した。

10月19日 ダルチュラ～ジョルジュビ

マハカリ川沿いの道も平坦な道となってきた。往路とは違いマハカリ川沿いからバイダディへ向かう。立ち寄る村では必ず、チャン、ロキシーを呑み昼間からフラフラ状態。今夜の宿泊地ジョルジュビ対岸のインド側では大きな音楽を流しすっかりお祭り騒ぎ。

10月20日 ジョルジュビ～シェラ

マハカリ川沿いはさらに開け、その広大な畑では牛による二毛作目の耕作が始まっている。この辺りの村はどこも大きな屋敷が立ち並び裕福そうである。

チャムリア川を渡りシェラに到着。マオイストから逃げてしまった無人の警察署に幕営。

10月21日 シェラ～バイダディ

シェラからマハカリ川を離れ1000mの急登でバスの発着地バイダディに到着。バイダディからは天候が良ければアピ、パンテ・チュリが望めると、この辺りで仕事をしていた八木原氏の弁。

10月22日～24日 ローカルバスをダンガリ、そしてカトマンズへと乗り継ぎ24日に到着した。

おわりに

アピ登山は終わった。サイパル、ナムナニと続いた一つの「夢」は幕を閉じた。

マオイストの心配される極西ネパールでの長いアプローチは想像通り楽しい昔ながらのネパールを満喫出来た。いつも思うが、それはやはり気心知れた楽しい仲間、そして優秀なスタッフがいたからこそ実現出来たと思う。

意気揚々とカトマンズに戻りまさかのミヤマ山岳会3名の訃報。そしてアメリカでのテロ、アフガニスタンへの空爆と悲しい事件を聞き、気分は大きく沈んでしまった。世界の平和を願い、ダウラギリに消えた3名のご冥福をお祈り致します。

最後になりましたが、バーバリアンクラブ、H A J、コスモトレック、松館氏、「風の又三郎」にはお世話になりました。有難うございました。そして多くのネパールの皆様ダンニャバード！

隊の構成

チーム・アピ・2001

主催：バーバリアンクラブ

隊長：野沢井 歩 (37)

隊員：岩崎 洋 (41)

隊員：今村 裕隆 (42)

隊員：古谷 朋之 (28)

隊員：荻原 文彦 (23)

支援隊員：今村 文子 (42)

リエゾン・オフィサー：K. B. タニ

サーダー：ディビ・ライ (37)

コック：アントレ・グルジー (30)

ローカル・キッチン：ラフマン・ライ (38)

ラムクリシュナ・グルン (25)

ローカル・ポーター：往路28名、帰路12名、ナイケ1名(往復)

地域ニュース

《ネパール》

冬のローツェ南壁登頂断念

ローツェ (8,516m) 南壁から冬期初登頂を目指していたJAC東海隊 (田辺治隊長 (40) ら7名)、12月20日C2 (7,100m) を出発し、8,050m地点に予定していたC3を目指したが、途中、7,300m付近で猛烈な風と落石に拒まれ、C3入りを断念し下山した。なお、飛田隊員は体調を崩し途中下山し帰国した。

《パキスタン》

政府ビルが火災

2002年1月15日午後6時 (現地時間) すぎ、イスラマバードにある内務省の関係機関などが入った16階建てのビルから出火、16日午前まで燃え続けた。内務省はムシャラフ大統領が宣言したイスラム過激派の取り締りを進めているところから、当局は詳しく原因を調べる。出火場所は16階の内務省付近らしい。(2002年1月16日 朝日新聞)

ラホール～デリー間バス路線がストップ

印パ間でただ一つ、1999年からラホール～デリー間を走っていたバス路線は、2001年末にストップし、両国民の陸路の往来は大幅に制限された。

(2002年1月18日朝日新聞)

《中国》

北京～デリー定期航空便開設へ

インドを訪問中の朱鎔基中国首相は、ニューデリーで2002年1月14日に行われたパジパイ首相との会談で、伝統的友好国パキスタンと緊張状態にあるインドとの関係を発展させる姿勢を明確にした。15日付の中国各紙によると、首脳会談で朱鎔基首相は、摩擦を抱えながら関係改善を進めてきた中印両国の関係を「全面協力」へ進展させるた

め5項目の提案を行い、今年3月から北京～デリーを結ぶ定期航空便を開設する考えも明らかにした。

(2002年1月16日 読売新聞)

新疆自治区に一級警戒態勢

2001年12月25日付の中国系香港紙「文匯報」によると、中国当局はこのほど、中国新疆ウイグル自治区のイスラム教分離独立勢力が活動活発化の兆しを見せているとして、同自治区国境地帯の警備・防衛に当たる部隊に対し、最も警戒度の高い「一級警戒態勢」を取るよう命じた。

(2001.12.26 読売新聞)

新疆独立派「ビンラーディン」が指揮

中国国务院新聞弁公室は、1月21日、新疆ウイグル自治区の分離独立を目指すウイグル族による「東トルキスタン」独立運動勢力の活動を詳細に記した報告書を発表した。長文の報告書は、同勢力がウサマ・ビンラーディンの指揮下で新疆イスラム国家樹立を図ったと指摘したほか、1999年8月にキルギスで発生した日本人技師4人らの人質事件にも、同勢力のテロ分子が関与したと記している。中国政府が、同勢力の活動を詳細、全面的に公表するのは極めて異例。

(2002.1.22 読売新聞)

トピックス

八千メートル峰2座初登頂者

クルト・ディームベルガー講演と映画の夕べ

日本山岳協会が「国際山岳年」を記念して「第40回海外登山技術研究会」の講師として招へいた、ブロード・ピーク (8,051m・1957年) とダウラギリ I (8,167m・1960年) の初登頂者であり、エヴェレスト、マカルー、ガッシャーブルム II、ブロード・ピーク (2回目)、K2に登頂している。オーストリアのクルト・ディームベルガー (70) が、半世紀にわたる登山活動を通しての講演と山岳カメラマンとして収録した映像を紹介する夕べが下記の通り開催される。

記

日時：2002年2月22日（金）18:30～21:00
 会場：ワーカーズサポートセンター大ホール
 （旧東京都勤労福祉社会館：八丁堀）
 入場料：大人1000円 高校生以下500円
 問合せ：（社）日本山岳協会事務局
 ☎03-3481-2396 FAX 03-3481-2395

「第23回 高所順応研究会」の開催

- *主催：東京都山岳連盟・海外委員会
- *日時：2002年3月24日（日）9:00～17:00
- *場所：国立オリンピック青少年総合センター
 小田急線参宮橋下車 徒歩5分
- *参加費：3000円（昼食は各自でお願い致します）
- *申し込み方法：参加申し込み書に参加費を添えて都岳連事務局まで現金書留で送付して下さい／FAXでも受け付けます。
- *申し込み・問い合わせ：
 〒104・0031 東京都中央区京橋1-9-9 湘南産業八重洲ビル401 東京都山岳連盟 事務局
 （月曜～金曜、午後1時～5時）TEL 03-5524-5231 FAX 03-5524-5232
- *研究会内容（予定）：
 : 高所順応その前に（海外委員会）
 : 高所障害の実例と対処（塩川純一Dr.）
 : 高所登山「凍傷」体験談（名塚氏、天野氏、大田氏）
 : 高所登山と「凍傷」（斎藤Dr.：群馬医大）
 : 質疑応答

Books

富山ヒマラヤ百年の記録

富山県人と関係者の「ヒマラヤ登山」を簡潔にまとめたものであるが、明治35年（1902年）大谷探検隊のメンバーである堀賢雄のパミール高原、ミンタカ峠越えから100年と云うことである。その他、石崎光瑤のインド行も収録されている。

登山は戦前の立教大学堀田弥一のナンダ・コートを含めて、実に110余隊が紹介されており、まさしく一つの県のヒマラヤ地域での活動を網羅し

ていると云えよう。

各県の関係者によってこのような種類の出版物が刊行されれば、戦後の日本人のヒマラヤ地域での活動の全容がまとめられるのではないか。その意味で価値の高い出版と云えよう。（山森）

A4判 344頁 カラー4頁 2001年12月15日
 北日本新聞社 1800円＋税

ヒマラヤから

ローツェ便り

ナマステ!!

11月4日再度ネパール入りです。9日にチャーターの大型ヘリでカトマンズからシャンボチェに飛びナムチェバザールに2泊後にキャラバン開始。14日にはチュクンからローツェ氷河の右側をつめローツェ南壁下5,200mにBCを設けました。

やはり“おおきな壁”です。17日未明にはゴーという音、明るくなると稜線には雪煙が舞い上り、冬到来なのでしょう。明日は隊員7名、サード、シェルパ、キッチン関係20名による安全祈願をした後に、ルート偵察を行ない12月1日より登山開始計画です。体調はお陰様で良く元気にやっております。

2001.11.17 ローツェBCにて 飛田和夫

- 財政支援金：10万円（酒井國光、鈴木雄一）
 5万円（宮崎久夫）3万円（中岡久）
 2万円（天城敏彦）1万円（関根孝次）
 5千円（丸野孝雄）

東京集会のお知らせ

日時 2月25日（月）午後7時～
 内容 ネパール新開禁峰をめぐる話題
 場所 HAJルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分）
 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

ネパール観光省、高峰103座を解禁

2001年12月20日にネパール観光省では103座を解禁すると発表した。下記のリストは観光省のオリジナル・リストである。山名、標高など不確実なものも多く、以前から解禁されていたGYAJIKANGが再び登場したりと、今後観光省から修正されていく事と思われる。正確な山名、標高、そして緯度、経度の発表が待たれる。

新たな7000m峰では、ベリ・ヒマールのRATNACHULI。クーンブ・ヒマールでは、チョー・オユーとパサン・ラム・チュリとの間のNAGPAIGOSUM（ナンパイ・ゴスム）山群などが解禁された。カンチェンジュンガ山群ではTALUNG（タルン・ピーク）、JYANAK（アウトライアー）などが解禁された。アウトライアーは数少ない未踏峰の一つである。7070mの標高が与えられているSHRUPHUIは現在ネパールの地図でも6410mとされている。

標高は高くないが、西ネパール、ダモダール・ヒマラヤの山々。クーンブ・ヒマラヤでは以前から注目を集めていたPEAK41,43が解禁された。又、クーンブとカンチェンジュンガ山群の間に位置する未知なるLUNBA SUNBA山群も解禁された。

これまでの解禁ピークは98座、昨年9座追加され更に今回の大幅な解禁峰が追加された事になった。（その他NMA扱いのいわゆるトレッキング許可ピークが18座ある）

しかしながら相変わらずの8000m峰を始め、有名峰に人気が集中しているのが現状で果たしてこれら多くの解禁峰に登山者は興味を示すのだろうか？

尚、6500m以下のピークはリエゾン・オフィサーが不要となる。

文責：野沢井 歩

（資料提供：コスモ・トレック）

| No. | 山名 | 標高 | 山群 | 地域（ ）内は発表高度 | 備考 |
|-----|-----------------------|------|---------------|------------------|------------|
| 1 | ROKAPI | 6467 | SAIPAL | BAJHANG | ロカピ |
| 2 | DHAULAGIRI | 6632 | SAIPAL | BAJHANG | ダウラガリ |
| 3 | KORKO | 6053 | SAIPAL | BAJHANG | |
| 4 | KHIURI KALA | 5806 | SAIPAL | BAJHANG | |
| 5 | ROMA | 5407 | SAIPAL | BAJHANG | |
| 6 | NAMPA II | 6700 | GURANS | DARCHULA-BAJHANG | N 1 |
| 7 | NAMPA III | 6618 | GURANS | DARCHULA-BAJHANG | N 3 |
| 8 | YOKOPAHAR (NAMPA VII) | 6401 | GURANS | DARCHULA-BAJHANG | |
| 9 | KANG NAGCHUGO | 6735 | GAURISHANKAL | DOLAKHA | カン・ナチュゴ |
| 10 | BAMONG | 6400 | GAURISHANKAL | DOLAKHA | |
| 11 | CHEKIGO | 6257 | GAURISHANKAL | DOLAKHA | チェキゴ |
| 12 | DINGIUNG RI | 6249 | GAURISHANKAL | DOLAKHA | |
| 13 | GANESHVI | 6085 | GAURISHANKAL | GORKHA (6480) | |
| 14 | TOBSAR PEAK | 6452 | SIRINGI HIMAL | GORKHA (6100) | タブサール |
| 15 | LARKYA PEAK | 6427 | MANASLU | GORKHA (6010) | |
| 16 | NAR PHU | 5748 | PERI | GORKHA | |
| 17 | TSO KAROP KANG | 6556 | KANJIROBA | HUMLA | ツォカルポ・カン |
| 18 | LHAYUL PEAK | 6397 | API HIMAL | HUMLA | アビ・レク |
| 19 | CHANGWA TNANG | 6125 | CHANDI HIMAL | HUMLA | |
| 20 | HIMJUNG | 7140 | PERI | MANANG | |
| 21 | GYAJIKANG | 7038 | PERI | MANANG | ギャジ・カン既許可峰 |

| No. | 山名 | 標高 | 山群 | 地域()内は発表高度 | 備考 |
|-----|------------------|------|-------------------|-------------------|-----------|
| 22 | PANBARI | 6587 | PERI | MANANG | |
| 23 | TILYE | 5697 | PERI | MANANG | |
| 24 | CHHUBOHE PEAK | 5603 | PERI | MANANG | |
| 25 | POKHRKAN | 6346 | PERI | MANANG/MUSTANG | ポカルカン |
| 26 | RATNA CHULI | 7035 | ANNAPURNA | MANANG (7128) | ラトナ・チュリ |
| 27 | KHUMJUNG | 6699 | DAMODAR (6348) | MUSTANG | |
| 28 | CHHIV HIMAL | 6520 | PERI | MUSTANG (6581) | チブ・ヒマール |
| 29 | JOMSOM PEAK | 6581 | DAMODAR | MUSTANG | |
| 30 | HONGDE | 6556 | DAMODAR | MUSTANG | |
| 31 | PUTRUNG | 6465 | DAMODAR | MUSTANG (6466) | プトルン |
| 32 | POKHARKAN | 6346 | DAMODAR | MUSTANG | ポカルカン |
| 33 | SARIBUNG | 6328 | DAMODAR | MUSTANG (6346) | ソリブン |
| 34 | KANG KURU | 6320 | DAMODAR | MUSTANG | |
| 35 | PULKHANG | 6120 | DAMODAR | MUSTANG | ブルクン |
| 36 | GAJANG | 6112 | DAMODAR | MUSTANG (6111) | ゲンジャン |
| 37 | GAUGURI | 6110 | DAMODAR | MUSTANG | |
| 38 | CHANDI HIMAL | 6096 | DAMODAR | MUSTANG | |
| 39 | ARNIKO CHULI | 6039 | DAMODAR | MUSTANG | |
| 40 | AMOLSANG | 6392 | DAMODAR | MUSTANG/MANANG | アマツォン |
| 41 | YUBRA HIMAL | 6035 | LANGTANG HIMAL | SHANKUWASAWA | |
| 42 | KYASHAR | 6770 | MAHALANGUR-MAKALU | SHANKUWASAWA | |
| 43 | EK RATE DADA | 6312 | MAKALU | SHANKUWASAWA | |
| 44 | HUNKU | 6097 | MAHALANGUR-MAKALU | SOLUKHUMBU (6119) | フンクー |
| 45 | PEAK43 | 6767 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU (6779) | |
| 46 | NAGPAI GOSUM I | 7312 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | ナンバイ・ゴスム |
| 47 | NAGPAI GOSUM II | 7275 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU (7296) | |
| 48 | NAGPAI GOSUM III | 7110 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | |
| 49 | PALUNG RI | 7012 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | |
| 50 | TENGI RAGI TAU | 6943 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU (6948) | テンギ・ラギ・タウ |
| 51 | CHOLA RI | 6934 | KHUMBU HIMAL | SOLUKHUMBU | |
| 52 | CHAGO | 6893 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | |
| 53 | KANTI HIMAL | 6859 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | |
| 54 | AMPHU I | 6840 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | |
| 55 | PANBUK RI | 6716 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | パンブク・リ |
| 56 | LINTREN | 6714 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU (6713) | リントレン |
| 57 | PETHANGTSE | 6739 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU (6710) | ベタンツェ |
| 58 | JOBO RINBJANG | 6666 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | |
| 59 | PEAK41 | 6654 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU (6649) | クーンブツェ |
| 60 | KUMBATSE | 6636 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU (6639) | |
| 61 | LANGMOCHEN | 6617 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | |
| 62 | OMBIGAICHEN | 6340 | MAHALANGUR-MAKALU | SOLUKHUMBU | |
| 63 | MACHHERMO | 6237 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | |
| 64 | KYAZO RI | 6186 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | ギャジョ・リ |
| 65 | NIREKHA PEAK | 6159 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | |

| No. | 山名 | 標高 | 山群 | 地域()内は発表高度 | 備考 |
|-----|--------------------------|-------|---------------|------------------|-----------|
| 66 | ABI | 6097 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | |
| 67 | GORKHA HIMAL | 6092 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | |
| 68 | PHARILAPCHA | 6017 | MAHALANGUR | SOLUKHUMBU | |
| 69 | LUZA PEAK | 5726 | MAHALANGUR | TAPLEJUNG | |
| 70 | YAMPHU GYABEIN | 5647 | MAHALANGUR | TAPLEJUNG | |
| 71 | TALUNG | 7349 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | タルン・ピーク |
| 72 | DOMEKHAN | 7264 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 73 | JANAK | 7044 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG (7090) | アウトライアー |
| 74 | SHARPHU I | 6410 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG (7070) | シャルプーI |
| 75 | CHABUK (tsajiaip) | 6754 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG (6960) | チャブク |
| 76 | ANIDESH CHULI | 6797 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG (6960) | ホワイト・ウエーグ |
| 77 | LOSHAR I | 6847 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG (6930) | ラシャル |
| 78 | SHARPHU III | 6157 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG (6885) | シャルプーIII |
| 79 | LOSHAR II | 6806 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG (6860) | ラシャルII |
| 80 | PANDRA | 約6500 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG (6850) | パンドラ |
| 81 | GHHANYALA HIES | 6779 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 82 | RAMTANG CHANG | 6812 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG (6750) | ウェッジ・ピーク |
| 83 | CHANG HIMAL(RAMYANG N) | 6750 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 84 | DAZANEY | 6584 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG (6710) | ザニエ |
| 85 | SOBITONGIE | 6670 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 86 | PHOLE | 6645 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 87 | LANG CHUNG KANG | 6475 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 88 | SHARPHU IV | 6433 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 89 | DANGA | 6355 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 90 | TAPLE SHIKAR(CROSS PEAK) | 6341 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 91 | MERRA | 6344 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG (6335) | メーラ |
| 92 | KYABURA | 6332 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 93 | SHAPHU V | 6328 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 94 | MDM PEAK | 6270 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 95 | SAT PEAK | 6220 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 96 | CHARPHU II | 6154 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 97 | BOKTA PEAK | 6143 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 98 | SHARPHU VI | 6076 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 99 | MOJKA PEAK | 6032 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 100 | SYAOKANG | 5960 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |
| 101 | WHITE WAVE | 6797 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG (5809) | |
| 102 | LUMBA SUMBA PEAK | 5672 | LUMBASUMBA | TAPLEJUNG | |
| 103 | LUMBA SUMBA | 5670 | KANCHENJYUNGA | TAPLEJUNG | |

ヤンラ・カンリからの眺望

P29
7871

マナスル
8163

ネムジュン
ギャジカン 7139
7038

チャマール
S N 7187

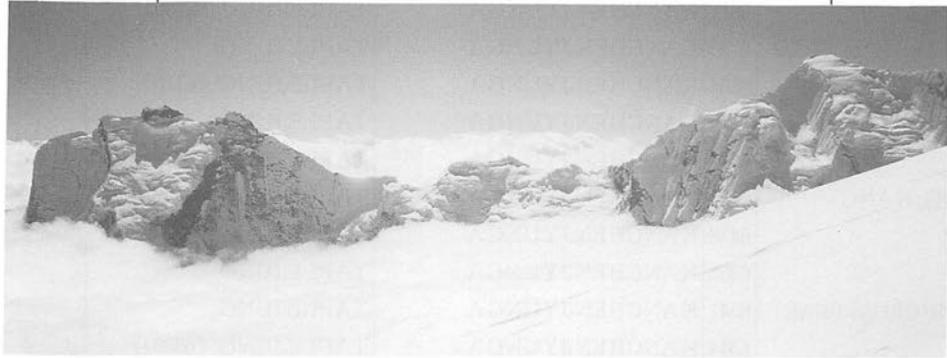
(北面から北西の眺望)



V
6816

ガネッシュ・ヒマール

III
7052 ラブサン・カルポ



(南の眺望①)

ランタン・リルン

7225

キムシュン
6760

ゲンゲ・リル
6571

(南の眺望②) 眼下の流れはチリメ・コーラ



(東から北東のパノラマ)

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|------|--------|------|-------|------|----|------|----|------|-----|------|--------|------|--------|------|--------|------|----------|------|---------|------|
| カバン | 6717 | カンベンチン | 7281 | ララガ・リ | 6671 | ゴロ | 6557 | プレ | 6769 | ダチュ | 6846 | ランタン・リ | 7205 | シシャバンマ | 8027 | エヴェレスト | 8848 | ランタン・リルン | 7225 | ゲゲンガ・リル | 6571 |
| (右手前の大きな山はブヨン) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |



(北から北々西のパノラマ)

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|---------|------|--------|------|----------|------|
| チントはC4 | 7187 | チャマル | 6192 | 6124 | 6245 | タブサール | 6452 | 6074 | 7095 | ルンポ・カンリ | 5114 | チョグラ・リ | 6514 | ランブー・カンリ | 6668 |
|--------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|---------|------|--------|------|----------|------|



■ 寸 感 ■

2001年も終わろうとする時、ネパール政府が突然103座の高峰をオープンすると云うニュースが飛び込んで来た。20年前なら日本はおろか世界中の岳界が騒然とするニュースである。しかし、残念ながら、6千米級のトレッキング許可ピークと、プモ・リ、アムダブラムと8千米級の山々だけに登山愛好家が集中している現在、この発表に心踊らされる登山者は数少ないだろう。ネ政府には国連山岳年の今年何とか努力して「ポカラ国際山岳博物館」のオープンを実現させて欲しいものだ。

(山森)

事務局日誌 (1月)

- 7日(月) 新年仕事始め
- 8日(火) 2名にニンチン・カンサ決定通知書
- 10日(木) ヒマラヤ363号発送
- 19日(火) 日山協「新春懇談会」於明治記念館
(酒井、山森)
- 21日(月) 中国登山協会へ2002年登山隊派遣に

ついてFAX

- 27日(日) 「第23回インド・ヒマラヤ会議」
於豊島勤労福祉会館 (35名)
- 28日(月) 東京集会 (20名)
猪突猛進会(白川義員氏) 於ホテル
パシフィック東京(山森、八木原、
尾形)
- 31日(木) 国連大学パブリックフォーラム「山
と私たち」於国連大学(酒井、山森)

ヒマラヤ No.364 (3月号)

平成14年2月10日印刷 14年3月1日発行

発行人 山森欣一

編集人 山森欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

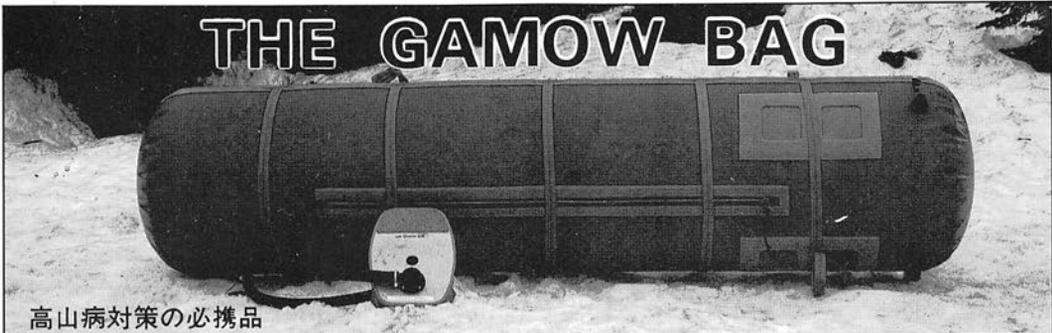
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13
TEL: (03) 3740-2674 (直)

| | | | | | | | | | | | | | |
|---------------------------------------|--|----------------------------|----------------------------------|---|----------------------------|--------------------------------|-----------------------------------|-------------------------------|---|--|---|---|--|
| 山小屋の主人の 炉端話 | すぐ役立つ 山の気象と救急法 | すぐ役立つ 記念日の山に登ろう | 山の百名水 | 北アルプス やまびと物語 | 北アルプス 山小屋物語 | 花と歴史の50山 | 改訂増補 六十歳からの 日本三百名山 | 新・山靴の音 | 中高年登山 なんでも百科 | さわやかに山へ | 登山の 運動生理学百科 | 山書散策 | |
| 著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一人話の取って置きのお話。 | 山の気象遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。 | 人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山は「1」。 | 山岳写真歴30年、北海道・利尻から尾久島まで、山の百名水を取材。 | 「岳人」に3年余り連載した「山人探訪・男達の賦」に加筆、登山をより楽しむための冊。 | 歴史を刻んできた66軒の山小屋をめぐる山と人の物語。 | 「花と歴史の山」の第2弾、花の山々を訪れた珠玉のエッセー集。 | 60歳から13年間で二百座を踏破したスーパージョージさんの山行記。 | 遭難をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。 | 「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむるよう、中高年登山の虎の巻。 | 世界的な女性登山家が、初著者アルプス・ヒマラヤを歩き、山を楽しむ安全下りへの道を伝えている。 | 「1」について合理的で安全な登山ができるのかを、ヒマヤやなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。 | 今まで数多く刊行された山書、何を読んだらよいか、そんな時の指針として「山人探訪」なら好評。 | ※東京新聞の販売店でも取り次ぎいたします。※本体価格に消費税が加算されます。 |
| 工藤隆雄 著 | 飯田睦治郎 著 桜井博幸 | 石井光造 著 | 山下喜一郎 著 | 柳原修一 著 | 柳原修一 著 | 田中澄江 著 | 田中三郎 著 | 芳野満彦 著 | 福島正明 著 | 田部井淳子 著 | 山本正嘉 著 | 河村正之 著 | |
| 1500円 | 1359円 | 1300円 | 1553円 | 1456円 | 1456円 | 1359円 | 1456円 | 1262円 | 1500円 | 1500円 | 2000円 | 1500円 | |

THE GAMOW BAG



高山病対策の必需品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キャロバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)

(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1

岩波書店アネックス5F

☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966



株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料)をご利用下さい。

☎0120-811395

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
- 新宿西口店/〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
- 神田登山店/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F) ☎03-3295-6622
- 神田本館/〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
- 八王子店/〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
- 大宮店/〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
- 高崎店/〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
- 川越店/〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
- 甲府店/〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
- 宇都宮今泉店/〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
- 太田高林店/〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
- 松本店/〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
- 長野店/〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
- 新潟店/〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

- 新潟とやの店/〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
- 仙台店/〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
- 秋田広小路店/〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
- 盛岡大通店/〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
- 札幌店/〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
- 北十二条店/〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
- 伏古店/〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
- 平岡店/〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
- 外高部(メールオーダー係)/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004